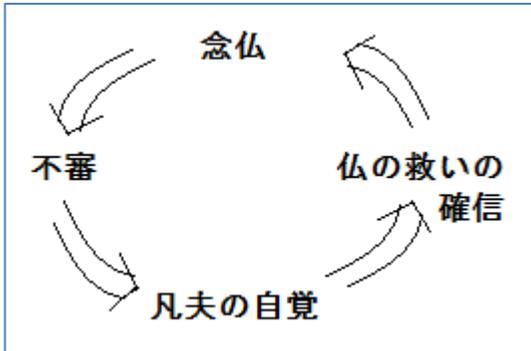


「お念仏のはたらき」と「お念仏のお育て」

お念仏のはたらきとは

四月二十六日連研資料



上の図はお念仏のはたらきを表したものです。この回路は、いつまでも回り続けているのではなく、スパイラルを描いて高まっていく学習運動です。つまり、お念仏は優れた学習運動なのです。歎異抄九章でいうと、
念仏をうれしいとは思わない↓私も同じである↓だからこそ弥陀の本願がある↓救いの確信↓報謝の念仏↓
では、お念仏のはたらきを知るために、先人がどのようにお念仏を称えてきたのかをさぐることから始めます。
私たちの称えている念仏のはたらきや意味が少しずつ浮かび上がってくると思います。

一つ目は、リマインダー（通報機能）としての念仏

古川のおさんの小説「郡上おんな」の主人公とりの「ただ念仏のみぞまことにて」のお念仏です。主人公とりは、いろいろな場面で念仏します。

越前穴馬郷で大火があり、姉を苦しめた家が焼けたという知らせを受けて心の中で思う場面でのお念仏。
『＜静子や守彦（姪と甥）は無事逃げたであろうか。おりの大事な姉さまに煮え湯を飲ませた因果応報よ＞と思う心の下からとりは——煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろずのことみなもて、そらごとたわごと誠あることなきに、**ただ念仏のみまことにておわします**——と言われた、御開山さまの歎異抄の一節を思い浮かべ、「なんまんだぶ、なんまんだぶ」と念仏するのであった。』

見事な念仏の使い方です。因果応報よ（ザマヲミロ）と思った下から、そらごとたわごと真あることなきに…と感じる。それは己のあさましい姿を照らし出します。そして、唯念仏のみぞ真にておわしますとなれば、念仏するしかありません。念仏はすべてを包んでくれるのです。

二つめは、様々な方便として働く念仏

ちちははの愛深かりし田舎家を 朝より念仏のこゑに満たして
喜びに悲しみに念仏したまへば 幼き耳もそをききれけぬ
わが父母はこの世に生まれ来りしは 真宗にあはんためと言わせし

中川幹子

喜びがわいて来たときに念仏。逆に、念仏をしていると喜びがわいてきます。

悲しいとき思わず出てくる念仏。辛いとき悲しいときに念仏。人間の悲しみを一緒に背負ってくれる念仏。わけがわからない時に念仏。どうしたらいいのかわからない時、念仏すると不思議に見えてくるものがあるものです。

そして、何よりもその念仏は相続するちからとしてはたらいています。

三つ目は、昭和20年7月9日夜8時岐阜空襲の時の心をしずめる念仏

野田よしえさん(当時11歳)の語られた戦時中のお話です。

「私は、岐阜駅近くの福住町に住んでいて、空襲と同時に、父・母・弟・妹と一緒に逃げました。家族がはぐれないようにと逃げたのですが、物凄いい人ではぐれ、「おとうちゃん、おかあちゃん」と大声で呼んでももういないんです。仕方がない、えらいこつちゃと思いつつ逃げました。逃げました。木之本小学校の近くまで来ると火の手が見えます。今度は北の方へ逃げました。そうやって逃げに逃げて、知らないお婆さんが「あんた、一人なの」ってびっくりしたようにおっしやって一緒に逃げてくれました。

お婆さんは、B29のゴォーという音や焼夷弾の落ちる音がするたびにしゃがみ込み、耳を押さえて「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と称えられ、私も真似て「なんまいだー、なんまいだー」と称えたらいくらか気持ちが悪く落ち着いたような気がしました。」

…これは、11歳の少女の恐ろしくも貴重な念仏との出会い。

四つ目は、救いとしてはたらく念仏

香樹院(徳龍) 語録より。徳龍師は越後の生まれで、お東の和上様(越後の人1772〜1856)。江州草津の木屋にて、女按摩、香樹院師を按摩しながら念仏したるに、「汝よく念仏せり」との仰せなりしかば、按摩はじ入りて、「うその念仏ばかり申して居ります」と答う。

師の仰せに、「おれも、うその念仏ばかりして居る。こちらはうそでも、弥陀のまことで御助けじゃぞや。」と。女倒れて悲喜の涙に咽びぬ。

この女性の按摩さんは目が不自由でした。その為にどれだけ苦勞をしてきたことでしょうか。

自身の身の境遇、そして、そこから来る苦勞、親さんの苦しみ：親を恨んだり、世間の冷たい仕打ちに涙したり、なぜこのような目にあわなければならないのか、何の因果で、この様な身体に生まれてきたのかと苦しんできたと思います。

目が見えませんが本を読むこともできません。だから、ただ耳でいわれを聞いて念仏を称えていたのでしょうか。でも、念仏を称えることはくせになっていました。

徳龍師にほめられて、「嘘の念仏です」と思わず言ったのは、念仏の生活の中で、己の姿を見つめて続いていたからです。日々称える念仏は我が身が心のあさましさを照らし続けていました。だから本当の念仏を称えるようになりたいと願っていたのです。

ところが、徳龍師の言葉は、私もあなたと同じうその念仏だという言葉でした。そして、こちらはウソでも弥陀の方はウソではないと。

彼女が倒れ込んで泣いた気持ちと同じように涙が出てきます。私の全責任(＝私の人生)を引き受けてくれる弥陀佛と初めて出遇った彼女の気持ち。私を生み出した仏が私の中に存在していると。

その時初めて自分自身の生を肯定することができたと思うのです。

五つ目は、仏の呼び声としての念仏

弘海師の問いに徳龍師が答えます。

聴聞を重ねて来たけれど、まだ心に聞こえない。どうしたら良いのか? ↓聖教をしっかりと読め。意味はわかるけど悟るまではいかない。だから往生が定まらない。 ↓良く聞け。

良く聞くとは？↓骨折って聞くべし。

身命を顧みない志にて聞くことか？↓そうだ。大事を聞くには間断なく聞け。法話のない時には聞いたことを常に思え。聖教を読むことも聞くこと。名号を称すことも法を聞くことだ。

「念仏するを聞くと申すは、我れ称えて我が声を聞く事か。」↓

「我が称える念仏と云うもの何処にあるか。称えさせる人なくして、罪悪の我が身が何で称えるものか。称えさせる人あつて称えさせ給う念仏なれば、そもそもこの念仏は、何のために成就して、何のためにか称えさせ給うやと、心を碎きて思えば、即ちこれ常に称えるのが、常に聞くのなり。」

称えさせ給うは、助けるために、一声をも称えさせて下されることよと思えば、それより称えることに就いて、尊く称えさせて下される身となりしなり。

六つ目は、報謝の念仏

美濃島与之助さんは信心者になるよりも念仏者になれと言われました。信心は仏より与えられるもの、報謝の念仏は自力の行。だから精進しなければならぬと。

「阿弥陀様は一声の念仏もあてにせずにお助けしてくれる。お念仏はご飯食べる時でも、道歩くときでも、せんにでも、どんな忙しい時でも称えられるように出来ておつてくれるで、一生懸命相続しなければならぬ。」

「子に礼をせよという親があるものか、念仏を離れると心が苦しいで称えよ称えよと仰せられるのです。」

「善知識様の御蔭でお念仏様、細々ながら称えさしてもらつておつて、お念仏様を称えねば助けてもらえぬとも、こんなおぞい心じゃで、助けておくれぬとも思いませぬ。そう思わぬのが邪見でないか知らん。」

人様が称えてくださらぬに、ちいとばか称えて、おれは称えると思うが邪見と驕慢で、地獄へ引きずり込まれるではないかと心を苦しみます。そして、どんな心で称えても、親様が捨てておくれぬ思いながら、ローソク一丁称えさしてもらうが大儀で、早うしまえりやよいがしまえりやよいがというような心であります。」

「仏法を聞かせてもらうには、此の身体をきつうせねばいかん。心臓をきつうせねばならん。」

「本当は有難い有難い、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と思つて称えさせてもらわならぬがあたりまえです。そうじゃけども三毒の煩惱が激しいから、有難いと思う心はできぬで、それだけはまけていただいて、唯、南無阿弥陀仏と称えさせていただけば、御報謝に備わつておくれるのです。」

七つ目は、自分のための念仏

その家のおばあさんがよく念仏をするのをほめた時、お孫さんがこう言われました。

「祖母の念仏は自分のための念仏で、自分が助かりたいがための念仏だ。」

念仏というものはもつと広いものではないか。自分だけ助かるというのは自己中心的ではないか。」

この問いかけは私自身への貴重な問題提起です。

歎異抄後序にある御開山の述懐

聖人（親鸞）のつねの仰せには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、それほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐候ひしこと・・・

「阿弥陀仏が五劫もの間思いをめぐらしてたてられた本願をよくよく考えてみると、

それはただ、この親鸞一人をお救いくださるためであった。思えば、このわたしはそれほど重い罪を負う身であったのに、救おうと思いついてくださった阿弥陀仏の本願の、何ともつたないことであろうかと、しみじみとお話になっておられました。

これが「**方便論的個人主義**」の最も突き詰められた表現です。ここには、阿弥陀仏と私以外は存在しません。でも、他者も私と全く同じように存在しています。弥陀の本願は私一人のためであったと言いきられたその裏に、私が救われるのならすべての人が救われるという自覚が同時にあるのです。そして、方便論とは、

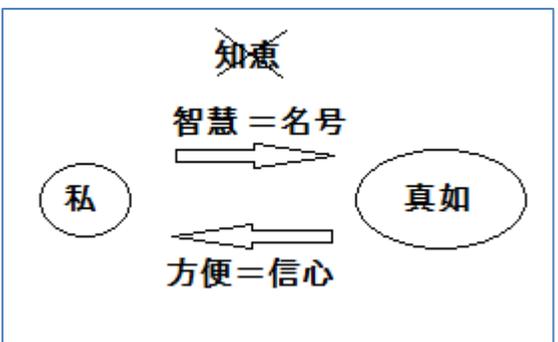
「阿弥陀仏の本願が真実であるなら、それを説き示してくださった釈尊の教えがいつわりであるはずはありません。釈尊の教えが真実であるなら、その本願念仏のころをあらわされた善導大師の解釈にいつわりのあるはずがありません。善導大師の解釈が真実であるなら、それによって念仏往生の道を明らかにしてくださった法然上人のお言葉がどうして嘘いつわりでありましょうか。法然上人のお言葉が真実であるなら、この親鸞が申すこともまた無意味なことではないといえるのではないのでしょうか。」と述べられるように、他者は私への阿弥陀仏の方便として現われてきます。ですから、私も他者にとっての方便なのです。

この「方便論的個人主義」の素晴らしい所は、他者問題が現われないところだと、安富歩さんは言われます。特に、私たちがある事象を調べる(学ぶ)場合に、この方便論は有効であると。学問を学ぶということは、先人の積み上げてきたものを学ぶことであり、先人の積み上げてきたものは今の私に対して働いているのです。

現象そのもの(真実)に迫ることは難しいけれど、そうやっているいろいろな他者の考え方を私の中に広げていくことができます。それが方便のはたらきの力です。

方便のはたらき

本願 ↓ 教え ↓ 解釈 ↓ 言葉・行為
私 ↑ 善知識 ↑ 親鸞 ↑ 法然 ↑ 善導 ↑ 釈尊 ↑ 阿弥陀仏 || 本願



真如からの私へのはたらきかけが方便ですから、図の様に智慧と方便が他力であることも領けます。

これらの念仏のどれが良い念仏かではありません。

自分自身の愚かさや怒りの心や貪りの心に気がついた時、光があたっていることに気がつきます。

気がつくということがすでに仏に救われているということであることです。だから報謝の念仏となります。

そして、その気づきは自分を責めるものではなく、自分を照らすものとなるのです。